

2022年度第34回熊本県美術家連盟 美術講演会
2022年6月25日(土) 市民会館シアーズホーム夢ホール 大会議室

演題 「アートイスト」に

ならないために」

《講師》都築響一氏（編集者・写真家）



都築響一さんには、悪天候の中、熊本に来ていただきました。講演では、初めに熊本県立美術館で開催されている美術家連盟展二階の美術館収蔵品展示にふれられ、ご自身が広島市現代美術館で企画された、いわゆる隠れ収蔵品展の話がされました。

この展覧会で分かったことは、そんなに名作でなくても、ちゃんと光を当ていい展示をするという作品が輝いて見えるという企画をして、知られていない作家を見つけ

ていく。こんな、いい仕事はないですねと。

また、以前、不知火美術館で見た塔本シスコ展にもふれられ、僕はこのように各地の美術館を廻って、それをメールマガジンで紹介しているのです。有料で週に一回出していきますとも話され、本題に入りました。次はその概要です。

今日は、私の話から、なぜ絵を描いているのか、感じて頂いたら幸いです。

年々、老人たちの取材が増える中、この1月から4月にかけて渋谷公園通りギャラリーで「Museum of Mom's Art ニッポン国おかんアート村」展をやりました。多くのおばあさんたちが趣味として作ったおかんアートは、全国どこにもあるのに、今までこの

類の展覧会がなかったので、今回、それらを集めて展覧会をしたわけです。

このおかんアート展の一面に、「おかんアートのはぐれ星」というコーナーを作りました。三人をフィーチャーしたので、その一人が嶋咲子さんです。最初に作品を見たのは、世田谷美術館分館の区民ギャラリーです。新聞紙で作ったバッグがずらり並んでいて、完成度が高く凄かったです。その会場の片方には100号のカラージュ作品も並んでいて、これも素晴らしい。新聞に入っている分譲マンションや分譲住宅、宝石などのチラシを集めて、それを細かく切って何万個もカラージュしているのです。もともと広告紙の再生なんです。丁度いいところに貼ってあるの

を描く人、土器みたいな絵を描く人、果物を描いたり、毎日の三食のメニューを描いたり、漫画みたいなものを描く人など本当に多彩な表現があります。ただただ刑を待つだけという究極のプレッシャーの中で生まれた表現です。作品は、全国のいくつかの場所を回ります。熊本に来たらぜひ見てください。ちようど今、パリでやっています。今年いっぱいありますのでパリに行かれた時には見てください。

次に、抜群に面白い写真家を紹介しします。天野裕氏君です。大牟田から今日、この会場に来てくれました。彼は、有望なサッカー選手でした。国見高校に行つてサガン鳥栖に入り、さらにブラジルで頑張っていました。しかし、そこで大け

がをしたんです。やむなく大牟田に帰つて、母親の仕事を手伝つていましたが、このままではいけないと、サッカーと一番違つた世界で勝負してみようと写真を選んだのです。自分の5メートル以内にあるものを撮つた写真集「塩竈の仏芝居」でいきなり受賞。普通なら、それを積み重ねて写真家になるので、すが、彼はそうではなく、全国に写真を撮りに行きたいと、中古の軽自動車で旅をします。ファミレスで食事、車で寝泊りし、撮つた写真をパソコンで編集。それをコンビニでプリントし、そのうち分厚い写真集ができるのです。普通は写真展をするのですが、彼はそうでなく、写真集を見せるのです。ツイッターで見に来る人を募り、1時間一人ずつ、予約を取り、見物料を一冊千円も

らつて、1対1で会つて見せているのです。そこがスナックだったりファミレスだったり、見る方も緊張するけど、見せる方も緊張です。それでお金をもらつて、たまにはプリントを売つて生活しているのです。見物料で生活するようになってもう10何年。写真も面白いので会いに行きました。これは彼の愛車で、その時すでに走行距離が一回り半。ご飯代とかガソリン代を捻出して、いくらでも日本中を回つていればいいわけです。こんな風にして生活している人がいるのかと、本当にうらやましい。写真メディアと全然違つたところで動いていられる。凄いなと思います。

まだまだ紹介しきれないので、このように、ギリギリのところ

生まれてくるアートは衣食住足りて生まれてくるアートとは全然違う真実感を持つているのです。でも、このプレッシャーで生まれる表現は、先生が教えてくれるものでもないし、家族が教えてくれるものでもなく、また、みんなが目指して出来ることではないでしょう。アートのためにわざわざ貧乏になる必要はないわけですし。たとえば、俺は写真をやりたいからすべてを捨てて車で生活するよ、と誰か言えば、それで食えるわけないから、やめろ、と言いますよ。僕の家族にもそういういますよ。それは、その人のためを思う心温かい助言なんです、何かやりたくてたまらないという時には耳をふさぎたくない時、その時、どうやって耳をふさげるかということが

一番大切なことで、学校とか先生とかに教えてもらうのとは全然逆なことですね。大人になることは、耳をふさぐすべを覚えられるかどうかだと思います。実はこういう人達を見て思います、が、耳をふさいだがためにこうなった、という言い方もあるし、どっちがいいかわからないけど、こういう風に、違つた形でアートと寄りそつて向き合う人もいるのだ、ということが分かつてもらえればここに来た甲斐があつたかなと思います。

ありがとうございました。

尚、紙面の都合で、現代詩の話を割愛させて頂きました。都築さんの著書「夜露死苦現代詩」ちくま文庫に詳しく書かれています。

(正村タカシ)